
チートはいいが、ハーレムはだめだ。

今ダ 果枯

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートはいいが、ハーレムはだめだ。

【ΖΖコード】

Ζ6146Ζ

【作者名】

今ダ 果枯

【あらすじ】

神様との相談の結果三つの取り決めのもと異世界転送することになった青年のお話。

「では、最後に取り決めを確認するぞ」

「ああ」

「まず、わしは、お前に二つの能力を作成する権利を与える。この作成する能力は生死を覆す能力以外なら何でも可能。

次に、基本次の世界での自由は保障されるものとする。そちらから干渉してこなければこちらから干渉することもない。

最後に、同時に複数の異性同姓と肉体関係を持つこと、要するにハーレムを作ることを禁止する。これを破つた場合お前には『決定した死』が与えられる。以上の二つじや

「オーケーだ」

「本当に言いのかえ」

「いひつて」

ふむ、変わった男じや。普通は転生することが決まつた人間は精神が肥大化してハーレムだのチートだの最強設定だの無理難題を要求していくことが当たり前じや。

そもそも転生なんて措置が取られるのは、大体が手違いだのケアレスミスだので理不尽な死が与えられた者だけに取られるものじやからのお。憤りを感じて面倒くさい要求を飲むことが当然じやと思つておる輩が多い。特にハーレムは男の夢だの何だのと……

「なんだ、顔に何かついてるのか?」

「いや、なんでもないが

本当に変わつた奴じや。

「本当にハーレムとかはいいのか」

鋭い目つきでこちらを睨んでくる。

「いひつて、しつこいなあ

「どうも、全く興味がないと言つては無い様だ。

「理由を聞いてもいいかえ」

まあ、理由を聞いておく。全知全能の神が人間に質問するのも変だと思うかもしかねんから説明しておくが。神は常に全知全能と言う訳ではない。神が全知全能になるのは人間界に降り立つたときだけと決まつてある。まあ理由としては全知全能じやないほうが人間を管理するとき不都合が起こりにくいかからである。

「理由は単純明快、ハーレムは金が掛かる」「なるほど」

「異世界トリップもののネット小説を読んで常に思うんだが、生活維持費は絶対、馬鹿にならない。2人3人くらいならまだしも、5人、6人と人が増えれば、食費、生活費だけでも馬鹿にならないはずだ。魔法や剣がある世界なら装備費とか魔術書とか整えるだけでも金が掛かるはずだろ？ ハーレム要員の全員が金を稼げるような奴とわ限らない、そう考へると、無駄にハーレム体质なんて貰つても金欠の元だぜ」

何というか、こんなところまで現実的な奴じや。既に転生したあとの事を考へておるのじゃろう

「それに、ハーレムつて失敗すれば『テッドエンド』に繫がるだろ。僕は、と言つた俺はそんなに器用じやないからね。不器用つていう自覚はあるんだ」

「お主、おもしろいのぉ」

「なあ」

「なんじや？」

「面白いついでなんだけどれ」

「つむ」

「もし、僕が、というか俺が魔王を討伐する事が出来たら、俺を神様にしてくれよ」

「よこぞ」

「即答！？ つてかマジで！」

「まじじゃー 神に一言は無いー！」

「俄然やる氣出てきたなあ、それもと転生？ てか、転送？ して
くれよ」

「どこのいい？」

「どこのでもいいよ、適当にランダムで」

「こべやー、ほあちやー」

ま、眩しい。…………行つてしまつた。面白い奴じゃった。

奴は神になると云ひことがどうこうとかわかつておつたのじゃ
ろうか？

人間界に關わらない限り時間も無く、永遠を怠惰で持て余し、死
ぬことが出来ず、ただ見守り続けるだけの存在に誰がなりたいのか。
まあ、神になつてからあやつが考えればいいことじゃが。

ふー、さつきは久々に楽しい思いをさせてもらつた。さてこれ
からどうなるかのあ。

デッボーン。

海に落ちた、否、叩きつけられた。

「くわあつ！」

いや、そうか、普通に考えたらそつな。この世界はどうか知ら
ないが、もといた地球は陸と海の比率は3対7、本当に普通にラン
ダムに転送したら海に落ちる確率のほうが高い。いやでも神様はサ
イコロを振らないって言つし。あいつ、わざと海に落としたんじや

……

しかしかなり痛い、全身の骨が折れたかと思つた。と言ひつか多分一回砕けた、砕けてからから治つた。

「既にチート並みの再生力だな、軽く人間こえてる」まあ、基本スペックが高い分には全然文句はない。

この状態で最悪なのは地平線が見えないことだろう。見渡す限り水平線。最悪だ。故意だろ故意に決まつてゐる。
体温が奪われて、体力が奪われるは駄目だ。さつやとどうにかしないと。

「能力作成、全知のオペレーターと通信、共感する能力」出来れば性格は従順で、罵倒してもむしろそれを快感として受け入れてくれるような奴がいい。僕……俺、イライラしてくると口が悪くなるからな。

「能力発動、えーと、通信能力だからテレパシーでいいのか？　まあいい、能力発動、テレパシー」

「うるさいです、ご主人様」

えつ、いや、まあ初めての能力だし。いいじやん

「えつと、一番近い陸地がどこにあるかわかる？」

「調子に乗つているのですか、ご主人様、わからない訳ないでしょう」

むかつくなんだこいつ、偉そだぞ。いつもと穏やかな性格の奴を想像したなのに、

と、とにかく、このまま、なし崩し的に尻にしかれるのは良くない。

い。

「おい」

声を一段と低くしてどすを利かしてみる・

「はつ、はひ！」

「オペレーターの分際で態度が過ぎるぞ」「なつ、ちょ、調子に乗らないで下さい」

「黙れ、殺すぞ」

まあ、テレパシーだけで殺せる訳がないのだが。
「そ、そんなこと出来る訳が」

「この俺様が命じる、死ね」

「う、わああああ

え！？ いきなり発狂。ど、どうこうことだつてばよ！？

「くやしー……！ でも……感じかけやつー（ビクビクッ）」

なんだ？この……

「あほか、茶番はそこまでだ」

「今までのことは遊びだったの、くやしー……！ でも……」

「しつこーー くびー！」

「い、「ごめんなさい、『主人様』

いきなり態度が、弱くなつたな。攻めに弱いのか？

「一番近い陸地はどうつちだ」

「あつちです

「わかつた」

あつちってどうつちだ？ と聞いこうとしたが、何となく感覚で「あ
つち」とわかつたのでやめた。

多分丸一日ぐらい、泳いだと思つ、体に疲れないが、全くの陸の
見えなさに精神の方は最早リアス式海岸。

「い、主人様？」

「勝手にそつちから話しかけるな」

無駄に体力を使う。

「ひつ、い、「ごめんなさい」

「まあ、いい、何だ？」

「なぜこんな面倒くさい能力になされたのですか？」

「面倒？」

かなり楽な能力だとと思うんだが。

「いちいち、オペレーターなんかと通信せずに自分を全知にする能力にすればよかつたじゃないですか」

「ああ、まあ、まず自分が全知になるってのは若干リスクかなって「リスク？」

「具体的に何かを危惧したって訳じやないけど」

今思いついたが、例えば、相手の知識を盗む能力とかと戦うことになつたら大変だし。

「なるほど」

「あと、一人旅になつた時でも話相手がいるってのは便利だろ」「孤独のなかで寂しくなつて死ねる自信がある。一人旅とか多分孤独死する。孤独死の意味若干違うけど」

「なるほど、そっちが本命ですか」

「べ、別に一人が寂しいとかそういうことじやないんだからね！」

「あつ！ 男性のシンデレット最近はやつてますよね！－！」

「なんで楽しそうなんだお？」

「そういえば、お前つて二十四時間暇なのか

「……？」

わかるぞ、こいつ「……？」って思つただろ？ なんとなくわかる。多分この能力わりと抽象的な概念でも伝えることが出来るのだろ？

「例えば、真夜中に通信しても大丈夫なのか？」

「ああ、はい、私は、あなたの能力作成のさい帳尻を合わせる為に作られた存在なので」

さらつと奇妙な出生話を聞いてしまつた。

「気に病むことはありませんよ、私もまあまあ楽しいですし」

「そうか」

「あと、この際、説明しておきますが私は正確には全知の知能は持つていません」

「なに！？」

「能力詐欺！？」

「わたしは、ご主人様のありとあらゆる疑問に自分の知識に関係なく正しい回答する能力とその義務を持っています」

「うん、じゃあ、お前からえた回答は必ず正しいって訳だな」

「はい」

「私然としないが、まあいいか。実質全知と同じことだし。

「あと、陸までどれくらいの時間がかかる」

「えーと、このペースなら3日ですね」

「3日！？」

長い！ 長すぎる！

念のため言つておくが、僕……というか、俺は大体、体感で水上オートバイぐらいの速さはでてる。これが限界だ。これ以上の速度もでるが。体力が持たない。現状が実質泳ぎ続けられる最高速。

「しかし、これ何て種族なんだ、疲れた端から回復していくぞ？」

「ご主人様は、この世界の既存の種族にカテゴライズ出来ない種族でございます、というかご主人様専用の新種族にござります」

「えっ、じゃあ、……いや、まあいいか」

うん、見かけは人間だけど力が強いし、アンバランスなほど魔力

少ないし。何より再生力と回復力が強すぎる。便利だけど。

「なんか魔王とか倒す前に孤独死しそう……」

「なんかこう同属がいなってのは……うん、こたえるな。

「待つてください！ ご主人様、私がいるではありませんか！」

「ソウダネー」

「鬼畜、非道、悔しいつ……でも」

「あ、ぐどい。」

「クッククック、面白ことになつておるのぉ
一人いぢかる、神様。

「さて、いわちもこいつで準備するかのぉ
もしもし、さつきからなに独り言つてますの?」

「いや、こいつの」とじや

「それより転生つてどうことですか?」

「ちつとは自分で考えてくれんかのぉ。

「お主の人生はこいつの不手際で終わつてしまつた
といふか、わしが殺したんじやが。

「まあ、仕様がないですわね」

「わりと冷めておるのぉ、これが最近の若者に多いドライツて奴か
?」

「どうなんでしょつか?」

「かつとは自分で……

「すまんがのぉ、お主こなとある世界に転生して魔王になつて欲し
いんじや」

「えつ、まあ、いいですけど」

さて、いわちもチート魔王を作るのを急がんとな。

久々の楽しいゲームじや。

(後書き)

最近、 続きが気になる終わり方を練習中。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6146z/>

チートはいいが、ハーレムはだめだ。

2011年12月21日21時53分発行